

異文化環境における異文化コミュニケーション能力と「パフォーマンス」の関係性
及び
「ハイ・パフォーマンス」のための異文化コーチングの有効性

1. 用語の定義

用語	ケンパーの定義
文化	人類学の視点より 「特定の集団の生活様式・事前環境に対する適応条件等・観念体系・象徴体系」(吉田 1987)
異文化環境	異なる文化に属する人間、または異なる価値観体系及び規範を有する人間が共有する場または空間
異文化コミュニケーション能力 (ICC 能力と略す)	異文化環境において、異文化接触しながら自らの課題を解決または自らの目標を健全な状況を保ちながら達成する能力 (健全な状態→自分・他者・組織) (Benett の DMIS、IDI、Byram の Intercultural Communicative Competence を参考)
パフォーマンス	生産性(業績、成績等々)と身体・精神的健康のバランス ハイ・パフォーマンス → 高度なパフォーマンス
異文化コーチング	異文化環境におけるクライアントのパフォーマンス及びクライアントの ICC 能力の向上を目的とするコーチング (「違い」への対処法を開発・実行することにより上記の目的を果たす) →IC 異文化コーチング(株)が開発した FACE 異文化コーチングモデルの応用

2. 研究の背景

年々進行する国際化の影響により多くの組織や学校法人は益々「異文化環境」に変わりつつある。つまり、異文化環境において、高いパフォーマンスを実現することが要求されているのである。

一方、異文化コミュニケーション学の近年の動向を追ってみると、「文化相対主義の実現」、「異文化寛容」や「ディープ・カルチャーに及ぶ異文化適応論」等のテーマが研究者の関心を集めていると考える(ケンパーの見解と解釈)。つまり、現実には起こっている「異文化環境化」において人々に求められている能力と異文化コミュニケーション学が提唱している学説の間に溝ができていますと実感している。理想論の提唱及び異文化現象の究明よりも、当研究は実際に応用可能な成果物として、異文化コーチングの提唱とその有効性の検証に挑む。

3. 研究の目的

- ICC 能力とパフォーマンスが互いに関係していることの証明
- 異文化コーチングの実施により ICC 能力が高まり、そして高まった ICC 能力によってパフォーマンスが向上することの証明
- マネジャー・指導者・教員等の立場の方に「異文化コーチング」というツールの提供

4. リサーチ・クエスチョンとケンパーの仮説

Q1 ICC能力はパフォーマンスに影響を与えるか（関係しているか）。

H1 異文化接触を伴う作業ならば、高いICC能力はパフォーマンスを向上させる、低いICC能力はパフォーマンスを低下させると考える。よって、ICC能力とパフォーマンスは関係していると予測する。

Q2 異文化コーチングの実施によって、ICC能力の向上、そしてその結果としてパフォーマンスの向上が促進させられるか。

H2 異文化コーチングを受けることによって、違いへの対処法が学習され、異文化摩擦等による非生産的なエネルギー消費が防止可能となる。よって、生産性が向上し、健康・精神状態が安定化し、パフォーマンスが結果的に向上すると予測する。

5. 調査対象

- ◆ 明確な目標または課題を有する協力者、日本在住の外国人留学生・社会人、外国人と関わる日本人

調査対象者（候補）

- PFU FUJITSU、東京開発センター、多言語翻訳チームのメンバー
（外国人翻訳者、日本人のDTPスタッフ及び管理職、計20名）
- IC異文化コーチング（株）の顧客（ドイツ・韓国に在住の日本人）

6. 研究方法（量・質的研究）

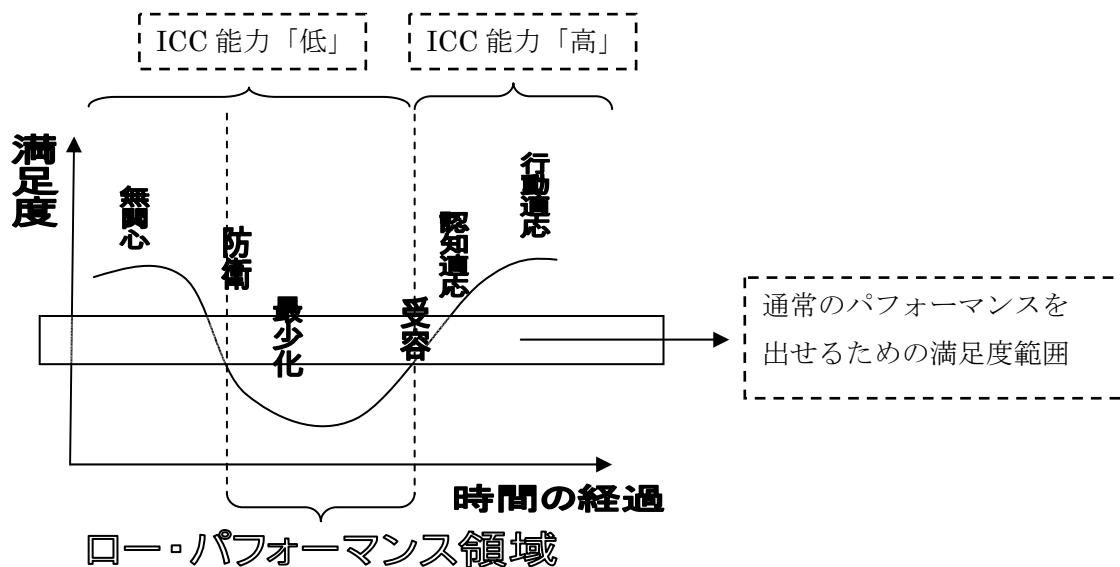
Q1に関して：

- 先行研究の調査 → 異文化コミュニケーション能力・異文化適応能力とパフォーマンスの関係（個人レベル・ビジネス・組織論）
- 意識調査

対象	ロー・パフォーマンスの多国籍チーム（PFU多言語翻訳チーム）
調査法	アンケート調査及びインタビュー
ポイント	リーダーとメンバーがそれぞれ低いパフォーマンスの原因として何を想定するかを聞いたうえ、作業（翻訳・マニュアル制作）においてICC能力がどれほど意識されているかを確認する
検証法	ロー・パフォーマンスは低いICC能力を示したり、ICC能力の意識が希薄だったりする場合に、低いICC能力と低いパフォーマンスの相関が実証される (vice versa)

参考 (適応論+ICC の能力の関連)

Intercultural Development Inventory (IDI) (Benett 1986) と満足度及びパフォーマンスの関係



Q2 に関して :

- 先行研究の調査 → コーチング・組織論
- 比較調査

対象	ロー・パフォーマーA ロー・パフォーマーB
調査法	Aに異文化コーチングを実施する Bに異文化コーチングを実施しない コーチングの前、最中と終了後にパフォーマンス（成果及び満足度等）についてのアセスメントを行う
検証法	異文化コーチングを受けたAの場合に、パフォーマンスの向上が見られ、そしてBのパフォーマンスに改善が確認できなければ、異文化コーチングの有効性が実証されると考える

7. 課題

- ICC能力の具体化（アセスメントに落とし込む）
- 既存のモデルをどの程度・どのように当研究に応用するか
 - ◇ DMIS (Development Model of Intercultural Sensitivity)
 - ◇ IDI (Intercultural Development Inventory)
 - ◇ Michal Byram の異文化コミュニケーション能力モデル

8. 参考文献

- Bennett, M.J.(1986). *A developmental approach to training for intercultural sensitivity*. International Journal of Intercultural Relations, 10, 170-198.
- Byram, Michael (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Multilingual Matters.*
- 井川俊夫(1987). 『国際化時代の海外駐在員：異文化への適応と人の国際化』 有斐閣.
- Graf, Andrea (2005). “Expatriate Selection: Evaluating the Discriminant, Convergent, and Predictive Validity of Five Measures of Interpersonal and Intercultural Competence “ *Journal of Leadership & Organizational Studies*, Vol. 11, No. 2, 46-62. 2008年11月30日 <http://jlo.sagepub.com/cgi/content/abstract/11/2/46> より情報取得.
- 金沢吉展(2001). 『異文化とつき合うための心理学』 誠信書房.
- Kim, Young Yun (2001). *Becoming Intercultural : an integrative Theory of Communication an Cross-Cultural Adaptation*. Sage Publications.
- Kumbier, Dagmar & Schulz von Thun, Friedmann (2006). *Interkulturelle Kommunikation: Methoden, Modelle, Beispiele*. Rowohlt Verlag GmbH.
- 熊谷ユリヤ(2007). 「異文化滞在者：異文化衝撃緩和, 異文化適応促進と異文化間対処能力」『札幌大学紀要』 Vol.23(20070300) pp. 91-101. 2008年11月30日 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006556815/> より情報取得.
- 久米昭元(2001). (編著) 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』 有斐閣.
- 鈴木一代(2006). 『異文化間心理学へのアプローチ：文化・社会のなかの人間と心理学』 ブレーン出版.
- 中根千枝(1972). 『適応の条件』 講談社現代新書.
- 林 吉朗(1994). 『異文化インターフェイス経営』 日本経済新聞社.
- 襲岩ナオミ(1995). 『壁が透けてゆく：異文化対応の極意』 筑摩書房.
- Matveev, Alexei V. & Milter, Richard (2004). “ The value of intercultural competence for performance of multicultural teams “*Team Performance Management*” Vol.: 10 5/6 pp.104 – 111. 2008年11月30日 <http://www.emeraldinsight.com/Insight/> より情報取得.
- 渡辺文夫(2005). 『異文化と関わる心理学』 サイエンス社.
- 山本 志都, 丹野 大(2001). 「「異文化感受性発達尺度(The Intercultural Development Inventory)」の日本人に対する適用性の検討：日本語版作成を視野に入れて」『青森公立大学紀要』 Vol.7, No.2(20020329) pp. 24-42 2008年11月30日 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110000485896/>より情報取得.
- 吉田禎吾 (1987). 文化 石川栄吉ほか(編) 文化人類学辞典 弘文堂.

2008年12月6日修士論文構想発表

異文化環境における
異文化コミュニケーション能力と「パフォーマンス」の関係性
及び
「ハイ・パフォーマンス」のための異文化コーチングの有効性
(仮)

ケンパー・マティアス

08VT008S 異文化コミュニケーション領域

発表の流れ

- 用語定義
- 研究の背景
- 研究の目的
- リサーチ・クエスチョンと仮説
- 調査対象・研究法
- 課題

用語定義

用語	ケンパーの定義
異文化環境	異なる文化に属する人間、または異なる価値観体系及び規範を有する人間が共有する場または空間
異文化コミュニケーション能力 (ICC能力)	異文化環境において、異文化接触しながら自らの課題を解決または自らの目標を健全な状況を保ちながら達成する能力 (健全な状態→自分・他者・組織) <small>(BenettのDMIS, IDI, ByramのIntercultural Communicative Competenceを参考)</small>
パフォーマンス	生産性(業績、成績等々)と身体・精神的健康のバランス ハイ・パフォーマンス → 高度なパフォーマンス
異文化コーチング	異文化環境におけるクライアントのパフォーマンス及びクライアントのICC能力の向上を目的とするコーチング (「違い」への対処法を開発・実行することにより上記の目的を果たす) IC異文化コーチング(株)が開発したFACE異文化コーチングモデルの応用

研究の背景

- 「使える異文化コミュニケーション学」
→ 異文化寛容より「異文化課題解決」
- 多言語翻訳チームの一員としての経験

研究の目的

- ICC能力とパフォーマンスの関係性を証明
- 異文化コーチングの有効性・意義の証明



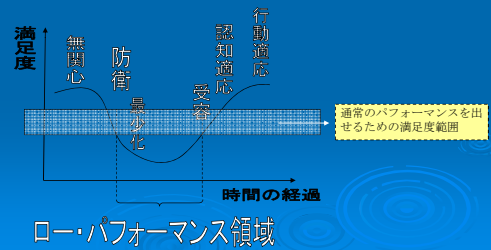
多文化チームを率いるリーダーにパフォーマンスを上げるためのツールの提供
(異文化コーチング)

(但し、異文化コーチングのモデルを既に開発・応用しておりますので、課題研究ではなく、修士論文にて当研究をまとめたいと思います。)

リサーチ・クエスチョンと仮説

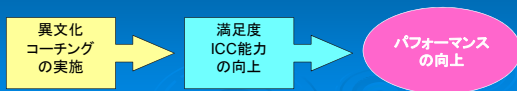
- Q1 ICC能力はパフォーマンスに影響しているか? (+/-)
H1 異文化接触を伴う作業なら、ICC能力は当事者のモチベーションと生産性(パフォーマンス)と関係している。

Intercultural Development Inventory (IDI) (Benett 1986)



リサーチ・クエスチョンと仮説

- Q2 異文化コーチングの実施によって、ICC能力の向上、そしてその結果としてパフォーマンスの向上が促進させられるか? (+/-)
H2 異文化コーチングを受けることによって、違いへの対処法が学習され、異文化摩擦等による非生産的なエネルギー消費が防止可能となる。よって、生産性が向上し、健康・精神状態が安定化し、パフォーマンスが結果的に向上すると予測する。



調査対象・研究法

対象

- 異文化環境におかれている、目標・課題を有する方
- ロー・パフォーマンス

候補

- PFU FUJITSU 東京開発センター (多言語チーム)
- IC異文化コーチング(株)の顧客

研究法(量的・質的)

Q1に関して：

- 先行研究の調査
- 意識調査
 - アンケート調査
 - インタービュー
- 焦点
 - ICCの意識？
 - 生産性・満足度
 - ICC能力

Q2に関して：

- 先行研究の調査
- 比較調査
 - 異文化コーチングを実施
 - ICC能力・パフォーマンスの測定

→ 実施 前・中・後
- 焦点
 - ICCの意識の変化
 - 生産性・満足度の向上
 - ICC能力の向上

課題

- ICC能力の具体化
(アセスメントに落とし込むこと)
- 既存のモデルをどの程度・どのように当研究に
応用するか
 - DMIS (Development Model of Intercultural Sensitivity)
 - IDI (Intercultural Development Inventory)
 - Michal Byramの異文化コミュニケーション能力モデル

以上

1. 研究題目 (修士論文)

異文化能力の概念化と応用
- 批判的再考 -

The Conceptualization and Application of Intercultural Competence:
A critical review

2. 研究の目的

当研究の目的は、既存の異文化能力及び関連する概念の諸理論(またはモデル)の体系化及び批判的考察である。その考察において、用いられる用語の整理、明確な区分及び定義を試みる。先行研究の批判的考察を踏まえ、成人の目標達成・課題解決を伴う短期的な異文化接触における、文化的知識の有無を必要条件としない特定の文化に限らない実用可能な異文化能力モデルを提示することは本研究の第二の目的となる。

提示するモデルの実証は本件研究において目的としないが、有効性を確かめるために1次データの質的分析を行う上、提示する異文化能力モデルの応用とその可能性について具体的に言及するつもりである。

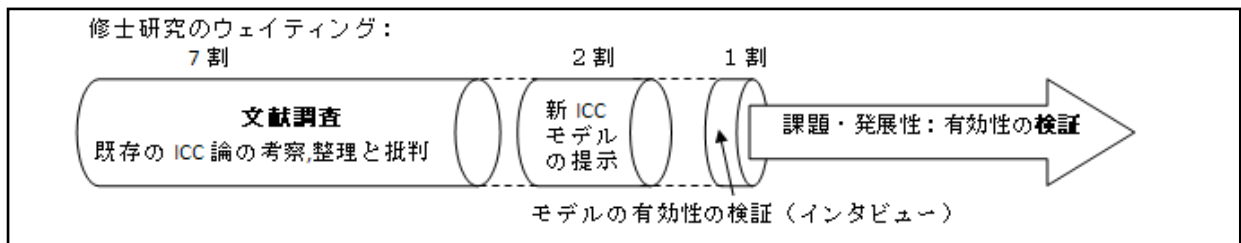
3. 研究の必要性 (意義)

異文化能力の理論・モデルの Review は分野ごとに発表されている(Hannigan 1991; Rathje 2006)が、大幅な学際的体系化及び批評、または異文化能力の理論的枠組み及び明確な定義が殆どなされていない。

それに、異文化能力に関する多くの研究が1990年代の調査・理論に基づき、長期的な異文化適応を想定しているため、2009年の現実に既存の理論が応えていないと考える。なぜならば、今現在、異文化接触はもはや日常的であり、ビジネスや交渉のような短期的な異文化コミュニケーションが頻繁に行われるからである。つまり、異文化適応を目的としない異文化(対人)コミュニケーションを円滑に図れるためには、文化的学習や異文化適応の理論が必ずしも効果的ではないと考える。一方、通常の文化内対人コミュニケーション能力が異文化コミュニケーションの成功を保証するとも考え難い。そのために、異文化能力の諸理論の考察が有意義である。

先行研究において、異文化能力理論や異文化能力モデルを提唱する論文が多数発表されているが、多くの場合に具体性と応用性が希薄である。現代社会の貢献に成り得る異文化能力研究は必然的に「現実性」と「応用性」を重視しなければならない。そのためには「関係構築」に焦点を当て、育成可能な異文化能力モデルを提示する必要がある。異文化能力の理論的枠組み、用語の明確な定義と区分、そして応用性の両側面を含む研究には社会貢献の可能性が大いにある故に、当研究が必要であると考えているのである。

4. 研究のコンセプトと調査方法



- **2次資料**の調査 (1960年代~現代までの異文化能力及び関連理論、社会科学、心理学、経営学等々)
 - 主流理論 (学会誌の投稿、頻繁に引用された理論) の批判的考察 (2次資料の体系化)

- **1次資料**の (質的) 調査 (本研究の焦点ではない。)

提示される異文化能力モデルの検証・証明が不可能ではあるが、モデルの有効性と普遍性を確かめるために7月、8月に 日・仏・韓・独人の協力者に半構造化インタビューを実施。

5. 既存の異文化コミュニケーション能力にまつわる諸研究・モデル・理論に対する批判

- 1-Sided (相互作用に関わる片方の参加者の異文化能力しか問われていない)
- 曖昧 (ICC能力の明確な定義とその目的が明確にされていない)
- 用語の混同 (異文化能力、異文化適応、異文化感受性、知覚、効果と効率、適切)
- 適応を中心 (調査対象者の殆どが移民・留学生か PCVs)
- 非現実的 (エンパシー、高度な異文化理解、知識、コミュニケーションスキル等々)
- 特定の文化・価値志向に依存している・または基づく (平等・文化的知識)
- 応用性・実用性が希薄 (適切な振る舞い・敬意・オープンマインドネス ⇒ とは?)

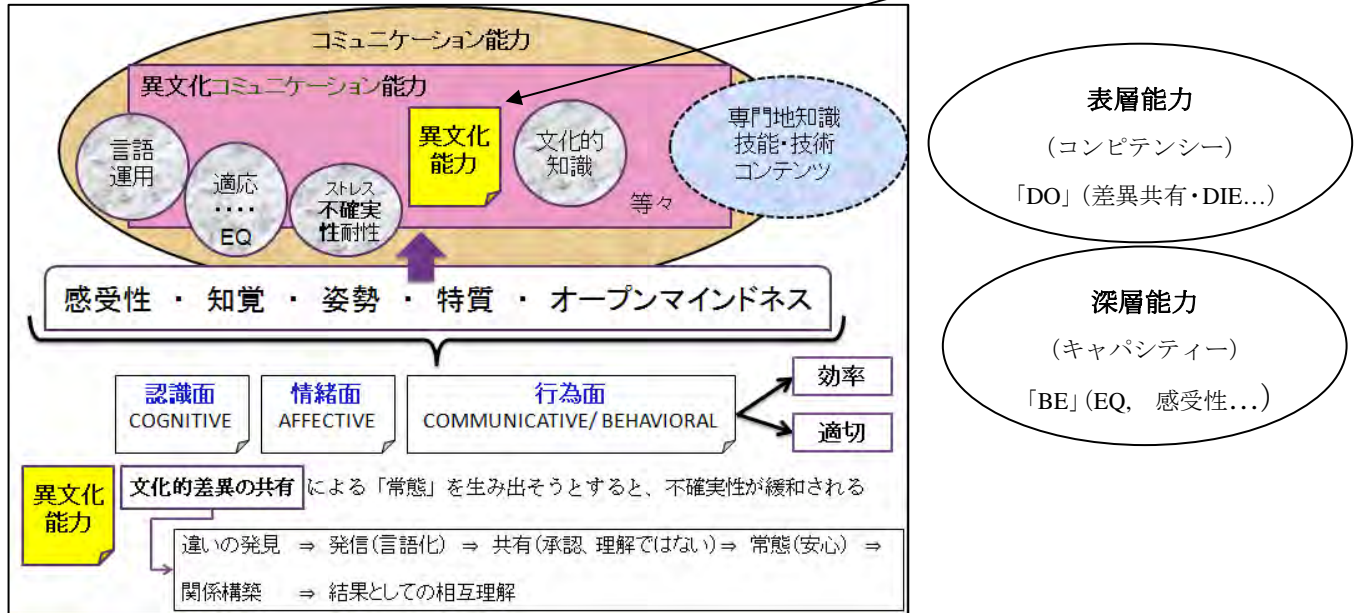
6. 現実性・応用性のある異文化能力モデルの条件 (モデルの提示と理論的裏づけ)

(主な) 条件:

- 特定の文化に限らない、または異文化理解・文化的知識の有無を必要条件としない
- 他の能力・技能との明確な区別が可能である

モデルの提示:

☆ 異文化コミュニケーション能力クラスターの中核としての異文化能力に焦点を当てる:



表層能力

(コンピテンシー)

「DO」(差異共有・DIE...)

深層能力

(キャパシティー)

「BE」(EQ, 感受性...)

提示する異文化能力モデルの理論的基礎と裏づけ:

- Rathje (2006)の文化機能理論 (文化の一貫性と結束性による文化成員の結びつき)
- Gudykunst (1993)の Anxiety/Uncertainty Management 理論、Cupach & Imahori (1993)の Identity Management 理論
- Bakhtin → Min (2001) 「相互理解は異文化能力の目的ではない」

7. 論文の章立て (仮)

はじめに	背景、目的、必要性、用語の定義 論文の構成、方法	
第1章	既存の異文化能力モデルと批判的考察 集団対集団 教育・学習、課題解決 (ビジネス) 心理学・感情・感受性 プロセス・体験型	先行研究の 考察と 批判的再考
第2章	新たな ICC モデルの提示 新たな ICC モデルの必要性 <ul style="list-style-type: none"> ▪ 異文化適応と異文化接触の区分 ▪ 異文化理解への疑問 ▪ 異文化能力における現実性 異文化能力の理論的條件 異文化の力における文化の機能 異文化接触における「常態」と「関係構築」 異文化接触における「成功」と「失敗」の考察 「差異共有能力」としての異文化能力: モデルの提示と検証	異文化能力の 概念化
第3章	「差異共有能力」としての異文化能力の応用 発信型異文化コミュニケーションの実践と限界 差異発見と差異共有の実践 教育・研修における異文化能力	異文化能力の 応用
おわりに	まとめ、課題 (検証)	

8. 進捗と今後の予定

- ❖ 先行研究・2次資料の入手 (約 170 本の論文・書籍・PDF 資料)
- ❖ 2次資料の要点まとめ、研究ノート (電子化)、文献目録の作成
- ❖ 2次資料の体系化 (概ねに完了)、ICC モデルの提示 (理論的考察) (概要が完了)
- ❖ 論文執筆 (V1 7月～)
- ❖ インタビュー (6月準備、7月日本、8月韓国とドイツにて実施)
- ❖ 9月～10月 論文 V2 仕上げ、DTP 編集、第三者チェック ⇒ 11月仮提出

参考文献 (一部)

- Adler, P. S. (1975). Beyond cultural identity: Reflections on cultural and multicultural man. In L. Samovar, & R. Porter (Eds.), *Intercultural communication: A reader* (2nd ed.) (pp. 362-378). Belmont, CA: Wadsworth.
- Arasaratnam, L. A. (2003). Intercultural communication competence from multiple cultural perspectives: A new theoretical model and empirical validation. Graduate School – New Brunswick Rutgers, The State University of New Jersey 博士論文 [UMI Microform].
- Arasaratnam, L. A., & Doerfel, M. L. (2005). Intercultural communication competence: Identifying key components from multicultural perspectives. *International Journal of Intercultural Relations*, 29, 137-163.
- Beamer, L. (1992). Learning intercultural communication competence. *The Journal of Business Communication*, 29, 285-304.
- Benett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 179-200.
- Benett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience* (pp. 21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Benett, M. J. (2004). Becoming interculturally competent. In J. Wurzel (Ed.), *Towards multiculturalism: A reader in multicultural education* (2nd ed.) (pp. 62-77). Newton, MA: Intercultural Resources Corporation.
- Benson, P. G. (1978). Measuring cross-cultural adjustment: The problem of criteria. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 21-37.
- Black, J. S., & Stephens, G. K. (1989). The influence of the spouse on American expatriate adjustment and intent to stay in Pacific Rim overseas assignments. *Journal of Management*, 15, 529-544.
- Bolten, J. (2003). *Interkulturelle Kompetenz*. Erfurt: Landeszentrale für politische Bildung.
- Bolten, J. (2006). *Interkulturelle Kompetenz. UTB-Handbuch der Medien- und Kommunikationwissenschaften*.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Bristol: Multilingual Matters.
- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (1996). Intercultural communication competence: A synthesis. In B. Burleson (Ed.), *Communication Yearbook 19* (pp. 353-383). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (1998). A review of the concept of intercultural awareness. *Human Communication*, 2, 27-54.
- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (2000). The development and validation of the intercultural sensitivity scale. *Human Communication*, 3, 2-14.
- Collier, M. J. (1989). Cultural and intercultural communication competence: Current approaches and directions for future research. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 287-302.
- Cui, G., & Van Den Berg, S. (1991). Testing the construct validity of intercultural effectiveness. *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, 15, 227-241.
- Cupach, W. R., & Imahori, T. T. (1993). Identity management theory: Communication competence in intercultural episodes and relationships. In R. L. Wiseman, & J. Koester (Eds.), *Intercultural communication competence* (pp.112-131). Newbury Park, CA: Sage.
- Deardorff, D. K. (2008). Intercultural competence: A definition, model, and implications for education abroad. In V. Savicki (Ed.), *Developing intercultural competence and transformation: Theory, research, and application in international education*. (pp. 32-52). Sterling, VA: Stylus.
- Erlil, A., & Gymnich, M. (2009). *Uni-Wissen: Interkulturelle Kompetenzen: Erfolgreich kommunizieren zwischen den Kulturen* (4th ed.). Stuttgart: Klett.
- Fantini, A. E. (1994). Developing intercultural communicative competence: An expanded goal for EFL. *TESOL-Spain Quarterly Newsletter*.
- Fox, C. (1997). The authenticity of intercultural communication. *International Journal of Intercultural Relations*, 21, 85-103.
- Gardner, G. H. (1962). Cross-cultural communication. *Journal of social psychology*, 58, 241-256.
- Gasset, J. O. Y. (2003). Communicating effectively with strangers. In W. B. Gudykunst, & Y. Y. Kim (Eds.), *Communicating with strangers* (4th ed.) (pp.269-294). Boston: McGraw Hill.
- Gudykunst, W. B. (1988). Uncertainty and anxiety. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Theories in intercultural communication* (pp. 123-156). Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B. (1991). *Bridging differences*. Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B. (1992). Being perceived as a competent communicator. In W. B. Gudykunst & Y. Y. Kim (Eds.), *Readings on communicating with strangers* (pp. 382-392). New York: McGraw-Hill.
- Gudykunst, W. B. (1993). Towards a theory of effective interpersonal and intergroup communication: An anxiety/uncertainty management (AUM) perspective. In R. L. Wiseman, & J. Koester (Eds.), *Intercultural communication competence* (pp. 33-71). Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (1997). *Communicating with strangers* (4th ed.). Boston: McGraw Hill.
- Gudykunst, W. B., & Hammer, M. R. (1988). Strangers and hosts: An uncertainty reduction based theory of intercultural adaptation. In Y. Y. Kim, & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-cultural adaptation: Current approaches* (pp. 106-139). Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., & Mody, B. (Eds.) (2002). *Handbook of international and intercultural communication* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., & Ting-Toomey, S. (1988). *Culture and interpersonal communication*. Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., Wiseman, R., & Hammer, M. (1977). Determinants of a sojourner's attitudinal satisfaction. In B. Ruben (Ed.), *Communication Yearbook 1*. New Brunswick, NJ: Transaction.
- Gudykunst, W. B., Yang, S. M., & Nishida, T. (1987). Cultural differences in self-consciousness and unself-consciousness. *Communication Research*, 14, 7-36.
- Haeberle, D. (2003). Meeting the challenge of developing intercultural competency: Perspectives on current practise. In *Hernsteiner: Interkulturelle Kompetenz* (pp. 10-15). Wien. Retrieved May 5, 2009, from www.hernstein.at/Media/2003-1_Interkulturelle_Kompetenz.pdf

- Hammer, M. R. (1987). Behavioral dimensions of intercultural effectiveness: A replication and extension. *International Journal of Intercultural Relations*, 11, 65-88.
- Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27, 421-443.
- Hammer, M. R., Gudykunst, W. B., & Wiseman, R. L. (1978). Dimensions of intercultural effectiveness: An exploratory study. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393.
- Hannigan, T. P. (1990). Traits, attitudes, and skills that are related to intercultural effectiveness and their implications for cross-cultural training: A review of the literature. *International Journal of Intercultural Relations* 14(1), 89-111.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's Consequences: International differences in work-related values*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Hofstede, G. (1986). Cultural differences in teaching and learning. *International Journal of Intercultural Relations* 10(3), 301-320.
- Hofstede, G. & Hofstede, G. J. (2005). *Cultures and organizations: Software of the mind*. New York: McGraw-Hill.
- Hwang, J., Chase, L., & Kelley, C. (1980). An intercultural examination of communication competence. *Communication*, 9, 70-79.
- Imahori, T. T., & Lanigan, M. L. (1989). Relational model of intercultural communication competence. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 269-285.
- Kealey, D. J. (1989). A study of cross-cultural effectiveness: Theoretical issues, practical applications. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 387-428.
- Kennerley, H. (1990). *Managing anxiety*. New York: Oxford University Press.
- Kim, Y. Y. (1991). Intercultural communication competence: A system-theoretic view. In S. Ting-Toomey, & F. Korzeny (Eds.), *Cross-cultural interpersonal communication*. (pp. 259-275). Newbury Park, CA: Sage.
- Koester, J., & Olebe, M. (1988). The behavioral assessment scale for intercultural communication effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 12, 233-246.
- Lustig, M. W. & Koester, J. (1993). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures*. New York: Longman.
- Matsumoto, D., Hirayama, S., & LeRoux, A. (2004). Psychological skills related to intercultural adjustment. In P. T. P. Wong, & L. C. J. Wong (Eds.), *Handbook of Multicultural Perspectives on Stress and Coping*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishing. Retrieved May 5, 2009, from <http://www.davidmatsumoto.info/Articles/Psychological%20skills%20related%20to%20intercultural%20adjustment.pdf>
- Matsumoto, D., LeRoux, J., Ratzlaff, C., Tania, H., Uchida, H., Kima, C., & Araki, S. (2001). Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: The intercultural adjustment potential scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations* 25(5), 483-510.
- Martin, J. N. (1993). International communication competence: A review. In R. L. Wiseman, & J. Koester (Eds.) *International and intercultural communication annual: Intercultural communication competence* (pp. 16-32). Newbury Park, CA: Sage.
- Min, E. (2001). Bakhtinian perspectives for the study of intercultural communication. *Journal of Intercultural Studies*, 22, 5-18.
- 中村久人 (2001). 「異文化接触と国際経営」『経営論集』第 54 号 (2001 年 11 月) 2009 年 5 月 11 日
<http://www.mng.toyo.ac.jp/publication/keieironshu/g200111/08nakamura.pdf> より情報取得.
- Nishida, H. (1985). Japanese intercultural communication competence and cross-cultural adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 9, 242-269.
- Parmenter, L. (2003). Describing and defining intercultural communication competence: international perspectives. In Byram, M. (Ed.), *Intercultural Competence* (pp. 119-143). Strasbourg: Council of Europe.
- Rathje, S. (2004). *Unternehmenskultur als Interkultur: Entwicklung und Gestaltung interkultureller Unternehmenskultur am Beispiel deutscher Unternehmen in Thailand*. Sternenfels: Wissenschaft und Praxis.
- Rathje, S. (2006). Interkulturelle Kompetenz: Zustand und Zukunft eines umstrittenen Konzepts. *Zeitschrift für interkulturellen Fremdsprachenunterricht* 11(3), 15.
- Redmond, M. V. & Bunyi, J. M. (1993). The relationship on intercultural competence with stress and the handling of stress as reported by international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 17, 235-254.
- Ruben, B. D. (1976). Assessing communication competency for intercultural adaptation. *Group and Organizational Studies*, 1, 334-354.
- Ruben, B. D. (1977). Human communication and cross-cultural effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 4, 95-105.
- Ruben, B. D. (1987). Guidelines for cross-cultural communication effectiveness. In L. F. Luce & E. C. Smith (Eds.), *Towards Internationalism* (pp. 36-46). Cambridge, MA: Newbury House.
- Ruben, B. D. (1989). The study of cross-cultural competence: Traditions and contemporary issues. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 229-240.
- Shaules, J. (2007). *Deep Culture: The hidden challenges of global living*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Spitzberg, B. H. (1988). Communication competence: Measures of perceived effectiveness. In C. Tardy (Ed.), *A handbook for the study of human communication* (pp. 67-105). Norwood, NY: Ablex.
- Spitzberg, B. H. (1989). Issues and development of a theory of interpersonal competence in an intercultural context. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 241-268.
- Spitzberg, B. H. (2000). A model of intercultural communication competence. In L. Samovar, & R. Porter (Eds.), *Intercultural communication: A reader* (9th ed.) (pp. 375-387). Belmont, CA: Wadsworth.
- Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (1984). *Interpersonal communication competence*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Stephan, W. G., & Stephan C. (1985). Intergroup anxiety. *Journal of Social Issues*, 41, 157-166.
- Taylor, E. W. (1994). Intercultural competency: a transformative learning process. *Adult Education Quarterly*, 44(3), pp. 154-174.
- Thomas, A. (2003). Interkulturelle Kompetenz: Grundlagen, Probleme und Konzepte. *Erwägen, Wissen, Ethik*, 14(1), 137-221.
- Ting-Toomey, S. (1993). Communicative resourcefulness: An identity negotiation theory. In R. L. Wiseman, & J. Koester (Eds.), *Intercultural communication competence* (pp. 72-111). Newbury Park, CA: Sage.
- Triandis, H. C. (1977). *Interpersonal behavior*. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- 渡辺文夫 (2005). 『異文化と関わる心理学』サイエンス社.
- Wiseman, R. L. (2002). Intercultural communication competence. In W. B. Gudykunst, & B. Mody (Eds.), *Handbook of international and intercultural communication* (2nd ed.) (pp. 207-224). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Yoshitake, M. (2002). Anxiety/uncertainty management (AUM) theory: A critical examination of an intercultural communication theory. *Intercultural Communication Studies*, 11, 177-193.

異文化能力の概念化と応用 — 批判的再考 —

The Conceptualization and Application of Intercultural Competence:

A critical review

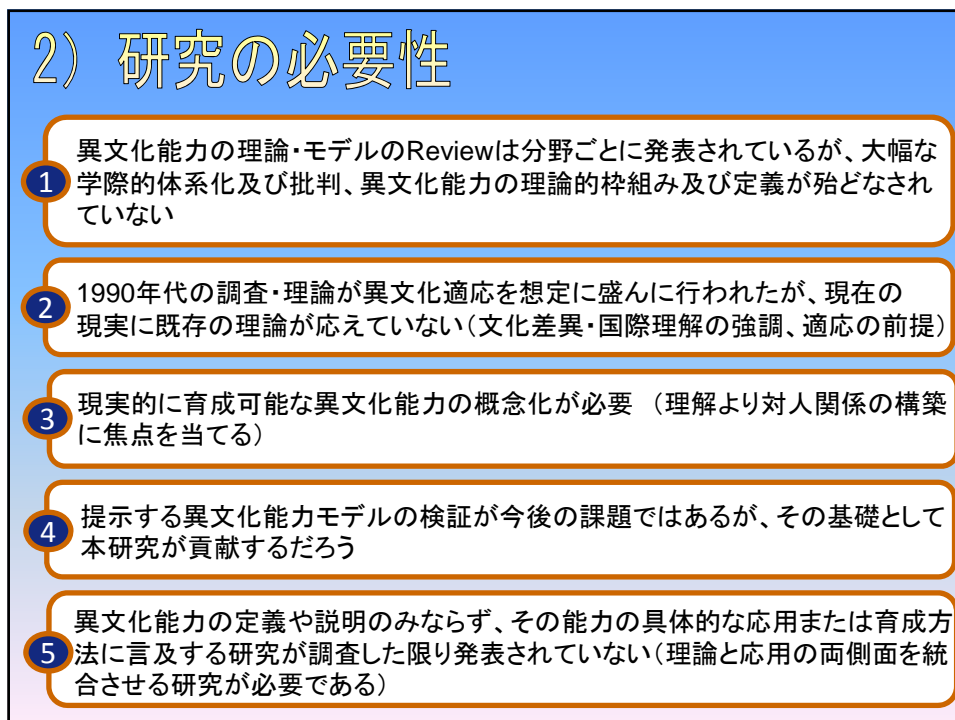
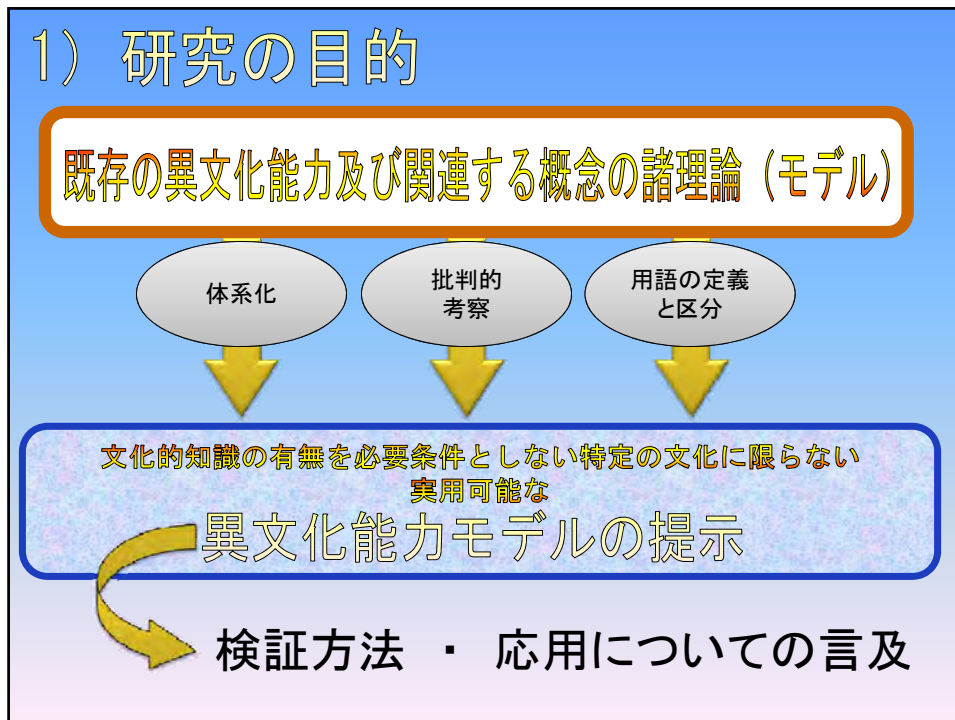
修士論文

ケンパー・マティアス 08VT008S 異文化コミュニケーション領域 M2

(指導教官: ショールズ、ジョセフ特任準教授・川嶋直特任教授)

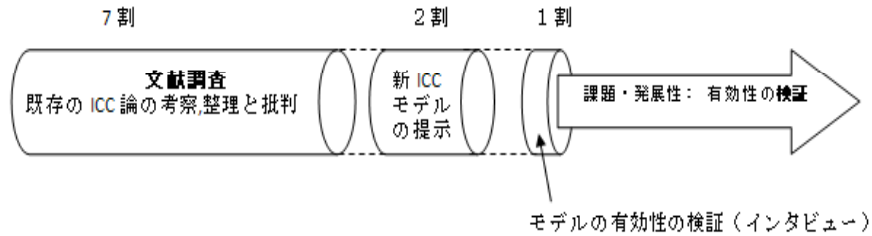
Overview

1. 研究の目的
2. 研究の必要性
3. 研究のコンセプト(企画)
4. 先行研究(既存の異文化能力モデルに対する批判)
5. 提示したい異文化能力モデルの概略(一部)
6. 進捗報告・課題



3) 研究のコンセプト(企画)

修士研究のウェイトिंग:



2次資料の調査

(1960年代～現代までの異文化能力及び関連理論、社会科学、心理学、経営学等々)

ICCモデルの提示

有効性を確かめるために半構造インタビューを実施(1次資料の質的分析)

+ 応用と可能性についての言及

4) 先行研究 (既存の異文化能力モデルに対する批判)

1-Sided

相互作用に関わる片方の参加者の異文化能力しか問われていない

曖昧

異文化能力の明確な定義とその目的が明確にされていない

用語

異文化能力理論における用語: 不統一・混同・関連性・文脈?

適応

異文化適応が前提であり、調査対象者の殆どが移民・留学生かPCVs

非現実的

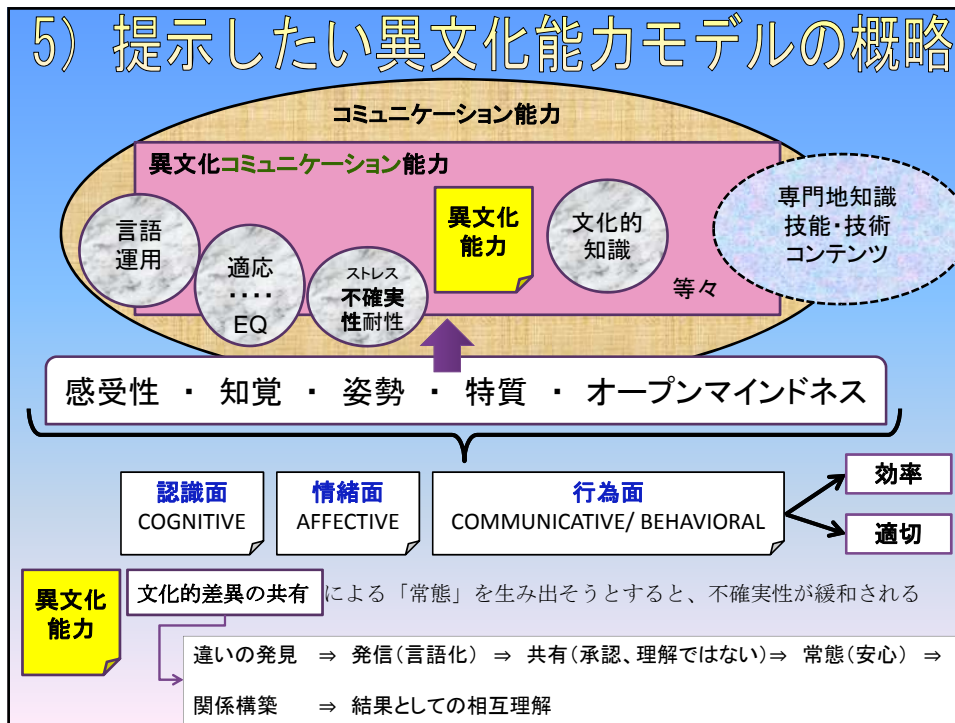
エンパシー、高度な異文化理解、知識、コミュニケーションスキル

文化

特定の文化または価値志向に基づく (平等・文化的知識の必要条件)

応用性

実用性が希薄 (適切な振る舞い・敬意・オープンマインドネス)



6) 進捗報告

- 先行研究・2次資料の入手 (165本)
- 2次資料の要点まとめ、研究ノート(電子化)、文献目録の作成
- 2次資料の体系化(概ねに完了)
- ICCモデルの提示(理論的考察)(概要が完了)
- 論文執筆(V1 7月～)
- インタビュー(6月準備、7月日本、8月韓国とドイツにて実施)
- 9月～10月 論文V2仕上げ、DTP編集、第三者チェック

⇒ 11月仮提出

以上